

チャーサーの話法と「主体」の演出

—childe (「トパス卿の話」、VII 806)の意義付けをめぐって—

中尾佳行

1. 本発表の目的

中英語作品は、近代の小説と比べ、個の分化が不十分、人格の一貫性が保たれていないと見なされ、話法を弁別する研究には消極的である。この点、チャーサーも例外ではない。中英語作品の話法では、この「個」観を一端脱却し、「主体」の演出として見直す必要があると思われる。主体は事態を概念化し、言葉に落とし込む、あるいは言葉を参照点に事態を再生する存在である。チャーサーにおいて、人物であれ語り手であれ、彼・彼女のテキストは一つの主体に容易に閉じられるものではなく、時には幾層もの主体に開かれ(写字生も含む)、その解釈を広げていく。先行研究は少なく、Fludernik (1993)は話法を体系立てるが主体の観点が不十分、Spearing (2005)は主体に着目するが話法タイプの視点が不十分、Moore (2011)は主体の問題を取り上げるが、人物のスピーチに限定的である。本発表では、話法が主体の演出を通してどのように着地し、意義付けられていくかを、「トパス卿」の childe とその関連表現を中心に考察した。

本発表の研究課題は次の3つである。

RQ 1: 認知主体はどのように広げられ、生み出されるか。

RQ 2: 認知主体の広がり、話法はどのように再定義されるか。

RQ 3: 認知主体の高次化を通して(語ることを語ることで)、何が抽象され、原理として問い直されるか。

2. 方法論

主体はフィクショナルスペースの人物、語り手、視点の転換装置“T”(テキストを参照点に読者と循環的に生み出していく主体)、そしてリアリティスペースの作家を想定。話法タイプはFleischman (1990)を参照した。

3. 検証

次の例を起点に研究課題—話法の意味生成プロセス—を検証した。The contree of Fairye / So wilde; / For in that contree was ther noon / That to him durste ride or goon, / Neither wyf ne childe; Thop, VII 802-806。(テキストはBenson 1987に拠る。)「縮減」に動機付けられ主体が分化・統合された。「縮減」のコンセプトと表現形式には平行性が看取された。縮減する詩型、テイルライム(詩行の強勢数: 4, 4, 3)、そしてボブ(1強勢)の付加、childeの女性韻化、childeとwildeとのチャイミング、childeの語義、final -eの機能、「縮減」を可視化するパラテキストとしての写本レイアウト、「縮減」の際立ち度の違い(写本及び初期刊本に見られる異同、例えばHengwrt MSとEllesmere MSの違い、初期刊本Caxton 1のボブの省略、Caxton 2のボブの追加)等。「縮減」はロマンスジャンル、認知方法・表現方法の真実性、語りの未完成性・循環性、メタ言語意識において、原理的な問題としても追究されていた。

4. 結論

RQ 1: 認知主体はどのように広げられ、生み出されるか。

childe及び関連表現を例に、認知主体が登場人物から語り手、そして視点の転換装置“T”まで、どのように広げられ、高められていくかを跡付けた。認知主体“T”は、意味論の最大のキーを握っているが、テキストとReaderのすり合わせで、生み出されていく。「縮減」は、メタファーとメトニミーを通して、主体間を数珠繋ぎに連動させていった。両者の相乗効果で、その認知方法はスキーマ化の段階に達していた。

RQ 2: 認知主体の広がり、話法はどのように再定義されるか。

認知主体は表現方法と一体である。話法タイプを設定して、チャーサーの話法はどの辺りが着地点かを捉えた。もっと本質的には認知主体のダイナミックな動きで、意味がどのように変容していくかを記述・説明した。

Direct SpeechであれNarrator's Report of an Actであれ、「縮減」のスキーマを介して新たな認知主体(写字生や刊本編者も読み手、書き手であり、主体に含まれる)に開かれ、意義付けはダイナミックに変容した。

RQ 3: 認知主体の高次化を通して(語ることを語ることで)、何が抽象され、原理として問い直されるか。

チャーサーは、認知主体を高次化し、ロマンスを語るという段階から「ロマンスを語ることについて語る」段階に達していた。本作品が中断される直前の「パーシヴァル卿のように泉の水を飲んだ」は、『ガレスのパーシヴァル卿』では語りの出発点、騎士になる前の子どもの段階に現れており、「トパス卿」の終わりは、戦い無く、また出発点に戻ることを示唆した。しかし同表現は『ガレスのパーシヴァル卿』の最後部にも現れ、戦いを経験し、悔悛し、また子どもの状態に回帰することも示唆した。戦いの無さは続く「メリベーの話」の復讐ではなく和を通して一層浮き立たされた。以上を持って、チャーサーの話法の先行研究を一步前進させた。